View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by CORE

Osaka Gakuin University Repository

Title	LI 構文の派生とその理論的帰結 (2) The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences: Part 2
Author(s)	川本　裕未 (Yumi Kawamoto)
Citation	大阪学院大学　外国語論集（OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES)，第 78 号：1-24
Issue Date	2019.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

大阪学院大学 外国語論集
第78号　2019年12月

LI 構文の派生とその理論的帰結 (2)

川　本　裕　未

3．Left Periphery

川本 (2019) で、LI 構文において前置された場所句は、SPEC-T に A 移動[6]し、T の持つ EPP 素性を満足させ、その後 TP の外側へ A-bar 移動していると結論づけた。しかしながら、そこでは LI 構文の場所句が、主語、つまり SPEC-T に位置する要素と同様の特性を有するいくつかの事例を提示し、さらに話題化された要素とも共通の特性を示す現象を挙げたに過ぎない。本稿では、LI 構文の派生において場所句が SPEC-T にいったん入った後、TP の外側に移動することによって、なぜ主語や話題化された要素と同じ特性を共有することになるのかについて、川本 (2019) で挙げた各事例をめぐり、極小理論の観点から説明を試みる。

まずは、場所句は具体的に TP の外側のどの位置に移動しているのかについて、Rizzi (1997) や Cinque (1999) にもとづいて検討する。以下の例文が示すように、LI 構文の場所句は補文内の補文標識 that の右側に生起していることから、その移動先は CP 指定部ではない。では、いったいどこに移動しているのであろうか。

(34) a. The scout reported that beyond the next hill stood a large fortress.
　　b. It was written in the plans that over the entrance should hang the gargoyle.

(Hooper and Thompson 1973)

話題化に関しても状況は同様である。話題化された表現も補文標識の右側に位置していることから、その移動先は CP 指定部ではない。

(35) It was decided that this building, they would demolish.

Rizzi (1997) は left periphery、つまり命題を表す IP（TP）の左側部分の構造について詳細に検討し、時制やモダリティ、焦点や話題等の情報構造をも含んだ談話領域と命題を結びつけるインターフェイスの役割を担う部分として、従来の CP を分割し、以下のような the cartography of syntactic structures を提案している。

(36) ... Force ... (Topic) ... (Focus) ... Fin IP[7]

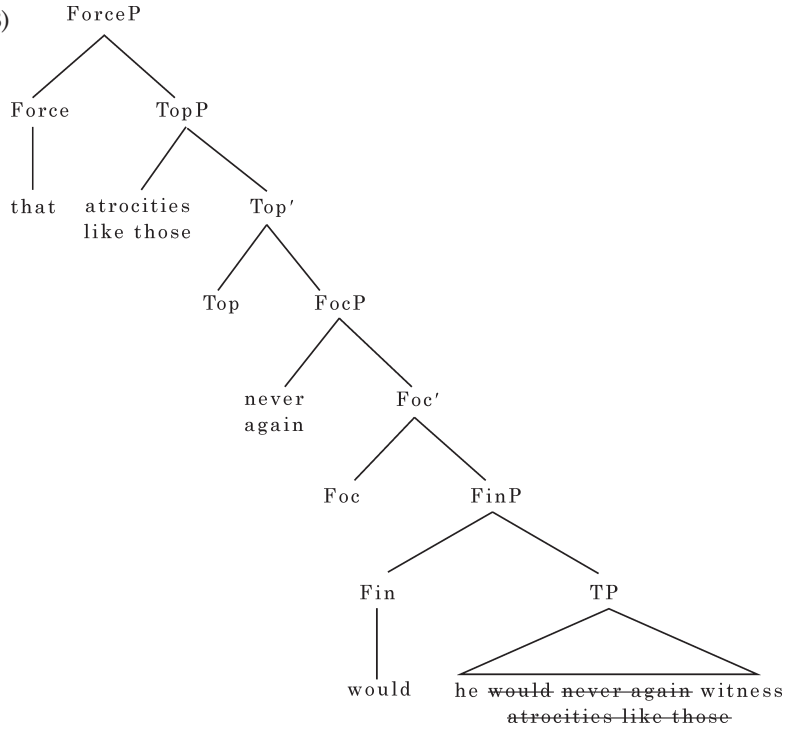
(Rizzi 1997)

Focus と Topic は随意要素で、その指定部に入る要素をそれぞれ焦点および話題として認可する。例えば以下の (37) における第２文の動詞 prayed の補文（that 以下のイタリック体の部分）は (38) のような構造を持つとされる。

(37) He had seen something truly evil－prisoners being ritually raped, tortured and mutilated. He prayed *that atrocities like those, never again would he witness*.

(Radford 2009)

(38)



つまり、(37) の第２文において、that は declarative の Force marker として Force の位置に、atrocities like those は前文で述べられているレイプなどの残虐行為を指す既知情報を再度話題にするものとして witness の目的語の位置から TopicP の指定部に、そして never again は強調される新情報、つまり焦点として TP 内部から FocusP の指定部にそれぞれ移動する。

LI 構文の場所句は既知情報として再度話題にのぼる表現であることから、上記の atrocities like those と同じく、TopicP の指定部に位置すると考えられる。LI 構文の場所句、および話題化文の話題要素が TopicP の指定部に移動していることは、下記の疑問文が非文になることからもその妥当性が支持される。

(39) a.*Will down the hill roll the baby carriage?
b.*Down the hill will roll the baby carriage?
(40) a.*Will this book, you really buy?
b.*This book, will you really buy?

LI 構文の (39a-b) および話題化文の (40a-b) において、a 文では助動詞 will が場所句や話題要素の左側に来ているのに対し、b 文では助動詞 will が場所句や話題要素の右側に来ていて、いずれも非文である。場所句や話題要素が TopicP の指定部に位置していると仮定することで、上記のいずれの派生も適切ではないことを以下のように説明することができる。

Rizzi (1997) は、(38) における would が示すように、Finite head が助動詞を誘引して疑問文が派生されるとしている。そうであれば、(39a-b) と (40a-b) においても助動詞 will は T head から Finite head に移動しているはずである。ところが、(39a) と (40a) では TopicP の左側に助動詞が来ており、助動詞の移動先である FiniteP は TopicP の右側に位置することから、ありえない構造として排除される。

(41) a.*Will [$_{TopP}$ down the hill roll the baby carriage]
b.*Will [$_{TopP}$ this book, you really buy]

さらに、Finite head による助動詞の誘引は、上位に位置する疑問の Force head から疑問の素性を継承したうえで、Finite head が T との間で Agree 関係を構築し、その Agree 関係に基づいて行われていると考えられているが、(39b) および (40b) では、間に Topic head が介在することで、Force head と Finite head の間の素性継承が阻止されるため非文となる。

(42) a. [$_{ForceP}$ Force [$_{TopP}$ Down the hill Top [$_{FinP}$ Fin [roll the baby carriage]]]]

b. [$_{ForceP}$ Force [$_{TopP}$ This book Top [$_{FinP}$ Fin [you really buy]]]]

以上のように、LI 構文の場所句、および話題化要素が TopicP の指定部に位置すると仮定することで、LI 構文や話題化文における疑問文 (39a-b) と (40a-b) が非文となる事実を説明することができることから、これらの要素は TopicP の指定部に移動していると結論づける。

４．極小理論による説明

川本 (2019) では LI 構文の場所句の分布特性として以下の点が提起された。

(43) 主語との共通点

a. Do-support を受けない

b. that・痕跡効果を受ける

c. 演算子の作用域に偏りがある

(44) 話題化された要素との共通点

a. 既知情報である

b. 主語節内での適用が許されない

c. ECM 補文内での適用が許されない

(45) 話題化された要素との相違点

弱交差を許す

上記のうち、(44a) の既知情報に関しては、前節で規定したように話題化された要素同様、LI 構文の場所句は TopicP の指定部に移動し、Topic head によって認可されるということで説明される。また、(44c) の ECM 補文内での適用

の不可能性に関しては、川本 (2019) で既に述べているように、ECM 補文は CP を欠いた不完全な TP（Rizzi (1997) の Left Periphery のアプローチを採用するなら、ForceP、TopicP、FocusP、FiniteP を欠いた不完全な IP）であるので、補文内に移動の着地点を持たず、そのため、話題化も LI も適用することができないということになる。したがって本節では、(44a) と (44c) を除いたその他の点について検討していくことにする。（具体的には本論で (44b) と (45) を議論し、(43a-b) は次回の Part 3で論じる。）

4.1 主語節内での適用が許されないことについて

まず、LI 構文の場所句と話題化された要素の共通の分布特性の一つとして挙げた (44b) から検討する。LI、および話題化は補文内での適用は可能であるが、主語節内で適用することはできない。

(46) a. The scout reported that beyond the next hill stood a large fortress.
b. It was written in the plans that over the entrance should hang the gargoyle.
c.* That over the entrance should hang the gargoyle was written in the plans.

(Hooper and Thompson 1973)

(47) a. It was decided that this building, they would demolish.
b.*That this building, they would demolish was decided.

以下では、なぜ主語節において LI や話題化を適用することができないのかという疑問に関して、まず談話的情報伝達の面から、主語節と叙実述語補文を分析し、これらの節の構造を提案する。そしてその LI や話題化を許さない構造は定の制限用法の関係詞節にも当てはまることを指摘し、その統語的特徴を傍

証として、本論で提案する構造の妥当性を主張する。

4. 1. 1 断定か前提か

補文内と主語節内の要素の分布の違いに関して、Hiberno-English と呼ばれるアイルランドで話されている英語変種が興味深い事例を提供してくれる。以下はアイルランド出身の作家の Roddy Doyle、James Joyce、John McGahern、Frank McGuinness の作品からの引用である。(McCloskey (1992), Henry (1995))

(48) a. I wondered [would I be offered the same plate for the whole holiday].

Roddy Doyle: *The Woman Who Walked into Doors*, 154

b. She asked the stewards [was any member of the committee in the hall].

James Joyce: *Dubliners*, 170

(49) a. The baritone was asked [what did he think of Mrs Kearney's conduct].

James Joyce: *Dubliners*, 176

b. You'd be better off asking [why did he marry me].

Frank McGuinness: *Dolly West's Kitchen*, 55

尚、(48a-b) および (49a-b) は次の (50a-b) のように直接疑問文の一部に主節が付加された表現とは異なることに注意されたい。

(50) a. Is he coming along, I wonder.

b. Where is Mom, the little boy wondered.

(48a-b) および (49a-b) の括弧で囲まれた補文部分では主節の動詞との時制の一致や主節の影響を受けた代名詞の選択をしていることから、当該部分は直接話法節ではなく間接話法節である。

(48a-b) は補文が Yes-No 疑問文、(49a-b) は補文が wh 疑問文の場合であるが、いずれの場合も Hiberno-English では動詞補部に interrogative の文タイプの補文が来た場合（つまり間接疑問節が来た場合）、主語・助動詞倒置が起こり、補文 T にあった would、did、was などがそれぞれ T-to-C 移動をしている、或いは Rizzi (1997) の Left Periphery 理論にしたがうなら、それらは T から Finite head に移動していることになる。

(51) a. I wondered [$_{ForceP}$ [$_{FinP}$ [$_{Fin}$ would] [$_{TP}$ I [$_{T}$ ~~would~~] be offered the same plate for the whole holiday]]].

b. The baritone was asked [$_{ForceP}$ what [$_{FinP}$ [$_{Fin}$ did] [$_{TP}$ he [$_{T}$ ~~did~~] think of Mrs Kearney's conduct]]].

つまり、Hiberno-English では文タイプが interrogative の時、標準英語と異なり、主文だけでなく補文においても T-to-Finite 移動が適用されるのである。しかし、そのような特性を持つ Hiberno-English であっても、主語節で主語・助動詞倒置が起こることはない。

(52) *[How many people should you invite] depends on how big is your place.

(McCloskey 1992)

さらに、補文であっても叙実述語（factive Predicate）の補文は主語・助動詞倒置を許さない。

(53) a.*The police discovered [who had they beaten up].
b.*I remember clearly [how many people did they arrest].
(McCloskey 1992)

非叙実述語の補文内の T-to-Finite 移動を許す Hiberno-English が、主語節や叙実述語補文の T-to-Focus 移動を禁止するのはなぜであろうか。

非叙実述語の補文は話者が真実性の判断を下している、つまり話者が断定（assert）しているだけで、真であることを前提にしているのではない。したがって、主文が negative になった場合、その影響を受けて偽になり得る。一方、文主語や叙実述語補文の命題は断定内容（assertion）にはなり得ない。以下の例が示すように、否定文内にあっても文主語や叙実補文の命題は否定されることがないことから、話者は文主語や叙実述語補文の命題が真であることを前提（presupposition）にしていることが示される。

(54) I didn't think that my mother was ill, and in fact she wasn't ill.
(55) a.*I don't regret that I left school before graduation, and in fact I didn't leave school.
b.*That I had left school before graduation didn't infuriate my parents, and in fact I hadn't left school.

文主語や叙実述語補文が前提を表しているのであれば、それらは discourse-old information（既出情報）、familiar information（既知情報）ということになる。前提、既出・既知情報の命題を持つ ForceP がその中にさらに既出情報を認可する TopicP や新情報を認可する FocusP を持っているとは考えづらい。したがって、文主語および叙実述語補文の ForceP には TopicP や FocusP が投射できないと考えられる。このことは、さらに関係代名詞節の統語的・談話的特徴からも裏付けされる（4.1.3節）。

4. 1. 2 主語節および叙実述語補文の統語的特性

非叙実述語補文は代用表現として it および so を取ることができるが、叙実述語補文は代用表現として so を用いることができず、より名詞的な特性を持つ it しか用いることができない。

(56) a. John supposed [that Bill had done it], and Mary supposed [it/so] too.
b. John regretted [that Bill had done it], and Mary regretted [it/*so] too.

(Kiparsky and Kiparsky 1970)

同様に、主語節を受ける代用表現も it であり、さらに主語節は再帰代名詞 itself の先行詞として機能することができる。

(57) a. [That Bill had lied] disappointed me, and [it/*so] disappointed my father, too.
b. [That Bill had lied] itself disappointed me greatly.

以上のことから、主語節および叙実述語補文 ForceP は定名詞（definite nominal）的特性を持ち、以下のように DP に支配されていると考えることができる。

(58) $[_{DP}\ [_{ForceP} \ldots]\ ]$

4. 1. 3 関係代名詞節

関係代名詞節には制限用法と非制限用法があるが、この２つの用法の間で主語・助動詞倒置や LI 構文の容認性について違いが見られる。

(59) a.*The car that only rarely did I drive is in excellent condition.
b. This car, which only rarely did I drive, is in excellent condition.
(Hooper and Thompson 1973)

(60) a.*The rotunda in which stands a statue of Washington will be repainted.
b. The rotunda, in which stands a statue of Washington, will be repainted.
(Hooper and Thompson 1973)

(59a-b) が示すように、否定表現の前置に伴う主語・助動詞倒置は制限用法の関係詞節では適用できないが、非制限用法の関係詞節内では適用可能である。また、LI を適用した (60a-b) でも、制限用法の関係詞節は非文であるが、非制限用法の関係詞節では文法的である。このように、主語・助動詞倒置、および LI の文法性に関して、制限用法の関係詞節は前節で論じた主語節や叙実述語補文に対応し、一方、非制限用法の関係詞節は非叙実述語補文にそれぞれ対応する。

以上、関係詞節の統語的特性について見てきたが、次に関係詞節の情報伝達機能について考察する。不定の関係詞節を用いている (61a) の持つ意味は「私は本を読みたくないのではなく、読みたくないのは先生が推薦する本だけだ」であり、否定されているのは「本」ではなく、関係詞節の方である。

(61) a. I don’t want to read a book which the teacher recommends.
b. I don’t want to read the book which the teacher recommends.

仮に関係詞節を削除して I don’t want to read a book. とした場合、文意が変わってしまい、「私は本全般を読みたくない」となる。文中で否定されるのは情報価値の高い新情報部分だとすれば、(61a) では不定の関係詞節が文全体の

伝達内容のなかで主節よりも中心的な情報を表していることになり、明らかに断定的である。それに対して、定の関係詞節を用いている (61b) は「私が読みたくないのはその本である」という意味を持ち、仮に関係詞節を削除しても意味は変わらない。関係詞節は、私が読みたくない本はどのような本なのかを特定しているに過ぎず、情報的には重要度の低い旧情報であり、前提を示している。

一方、非制限用法の関係詞節を用いた文では、伝達される情報が主節部分と関係詞節部分の２つに分割されていると考えられる。非制限用法の関係詞節を含む (62a) の問いに対して、(62b) のように関係詞節も含めて答えた場合、容認度が落ちる。これは (62a) の質問の対象が主節の内容に限られ、関係詞節の内容は含まれていないことを示している。

(62) a.　Did you read Schwartz's exam, which I left on your desk?
　　b.??Yes, I read Schwartz's exam, which you left on your desk.
　　c.　Yes, I read Schwartz's exam.

（McCawley 1981）

さらに、非制限用法の関係詞節は付加疑問文にすることができる。

(63) a.*I just ran into the girl who was your roommate at Radcliffe, wasn't she?
　　b. I just ran into Susan, who was your roommate at Radcliffe, wasn't she?

（Hooper and Thompson 1973）

制限用法の関係詞節の命題に対して付加疑問文を作ることはできないが、非制限用法の関係詞節の命題は付加疑問文にすることが可能であることから、

(63b) では、伝達される情報が主節と関係詞節の２つに分割され、ともに別々に断定が置かれていることになる。(62b) の応答文の容認度が低かったのは、(62a) は主節の命題についての真偽を尋ねているのに、(62b) では別の断定的命題の関係詞節まで含めて返答しているからである。

これまで考察した非叙実述語補文、叙実述語補文、主語節、そして制限用法の関係詞節と非制限用法の関係詞節をまとめると、次のようになる。ただし、4.1.2節で指摘したように、今問題にしている主語節（および叙実述語補文）は定名詞の特性を持つことから、ここでの議論で必要となってくる関係詞節は定の関係詞節であるので表中には定の関係詞節のみを載せている。

(64)

		主語・助動詞倒置	LI（and 話題化）	情報機能
非叙実述語補文		△	○	断定
叙実述語補文		×	×	前提
主語節		×	×	前提
定の	制限用法の関係詞節	×	×	前提
	非制限用法の関係詞節	○	○	断定

非叙実述語補文の主語・動詞倒置の欄が三角になっているのは、標準英語では主語・助動詞倒置は許されないが、Hiberno-English では可能なためである。標準英語では補文 C の持つ素性の特性の違い[8] から主語・助動詞倒置が排除されるが、その点を除けば英語は非叙実述語補文での主語・助動詞倒置が可能であると考えられる。上記の表から、主語・助動詞倒置と LI（および話題化）が可能なのは情報機能に断定を置いている場合であり、逆にそれらの操作が不可能なのは、情報機能に前提が置かれている場合であることが示される。4.1.1節で前提、既出・既知情報の命題を持つ主語節と叙実述語補文の ForceP

は新情報や旧情報を認可する TopicP や FocusP を投射しないと提案したが、もしこの提案が正しければ、主語節や叙実述語補文と同じ特性を持つ定の制限用法の関係詞節も同様に TopicP や FocusP を投射していないと考えるのが妥当である。

さらに、定の制限用法の関係詞節が FocusP を投射していないことを裏付ける別の証拠が、関係詞節への文副詞の挿入の可否から導き出される。

(65) a.*The only paper that, frankly, I didn't understand was hers.
　　b. John, who, frankly, was incompetent, was a friend of mine.

非制限用法の関係詞節では文副詞の frankly を挿入することが可能であるのに対して、制限用法の関係詞節に frankly を挿入することは許されないという事実から、前提を担う ForceP には文副詞が融合 (Merge) すべき FocusP が欠落していることが示唆される。このことから、表 (64) において定の制限用法の関係詞節と同じ特性をもつ主語節（および叙実述語補文）も FocusP を投射していないこと、ひいては FocusP と同様に情報構造を担う TopicP も投射していないことが示唆され、この関係詞節の事実からも、主語節には LI 構文の場所句、および話題化文の話題要素が移動する到達点がないという結論が導かれる。

この第4.1節のテーマは LI と話題化の共通点の１つである (44b)、すなわち「主語節内での適用が許されない」に対して統語的な説明を与えることであった。考察の結果、主語節は情報伝達機能上前提を担うことから、その ForceP は TopicP と FocusP を投射しておらず、LI 構文の場所句や話題化要素に移動先を提供することができないことになり、そのため LI と話題化を適用することができないという結論を得るに至った。

4. 2 弱交差を許すことについて

話題化文と同様の分布を示すことの多い LI 構文であるが、(45) で示したように弱交差に関しては話題化文は非文となるが、LI 構文は弱交差を許す。

(66) a.*Into every dog$_i$'s cage, its$_i$ owner peered.

b. Into every dog$_i$'s cage peered its$_i$ owner.

(Culicover and Levine 2001)

交差効果とは、wh 句が同じ指標を持つ代名詞を越えて移動し、以下のような構造を作り出すことをいう。

(67) wh$_{2i}$ ... pronoun$_i$ ... ~~wh$_{1i}$~~

(67) において元位置の wh$_{1i}$ が中間の代名詞に C 統御されている場合は強交差と呼ばれ、容認度は著しく低い。以下の (68a) が強交差の例であり、その派生は (68b) のように表される。

(68) a.*Who$_i$ does he$_i$ think can fly?

b.*Who$_{2i}$ does he$_i$ think ~~who$_{1i}$~~ can fly

who$_{1i}$ は who$_{2i}$ に束縛[9] される変項（variable）であるため、項束縛（A-binding）されることは許されない。しかしながら、(68b) では who$_{1i}$ は項の位置にある代名詞 he$_i$ に C 統御され、且つ同一指標を有しており、代名詞 he$_i$ によって項束縛されていることになるため非文となると考えられる。一方、(69a) のように、その派生を表す (69b) において代名詞が who$_{1i}$ を C 統御していない場合を弱交差と呼ぶ。

(69) a.?*Who$_{2i}$ does his$_i$ mother love?

b.?*Who$_{2i}$ does his$_i$ mother love ~~who$_{1i}$~~

代名詞 his$_i$ は who$_{1i}$ と同一の指標を与えられているが C 統御の関係ではないので who$_{1i}$ を束縛はしていない。そのため完全な非文にはならない。Koopman and Sportiche (1982) は (69) が強交差ほどではないが容認性が低くなっている理由について以下の Bijection 原理を用いて説明している。

(70) The Bijection Principle:

Each operator binds one and only one variable, and each variable is bound by one and only one operator.

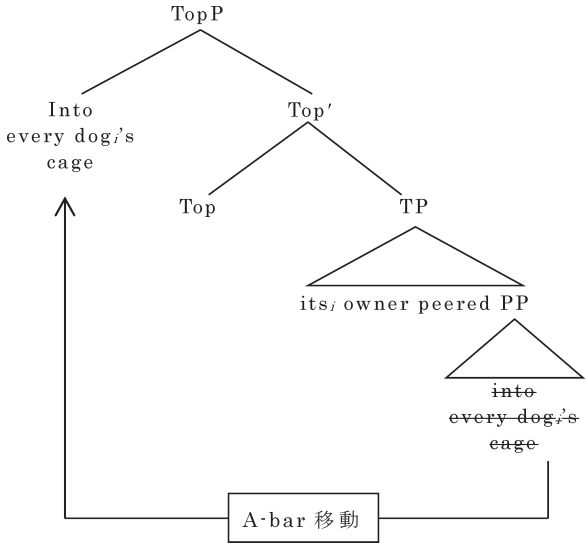
variable（変項）は以下のように定義される。

(71) α is a variable if it is in an A-position and is locally A-bar bound.

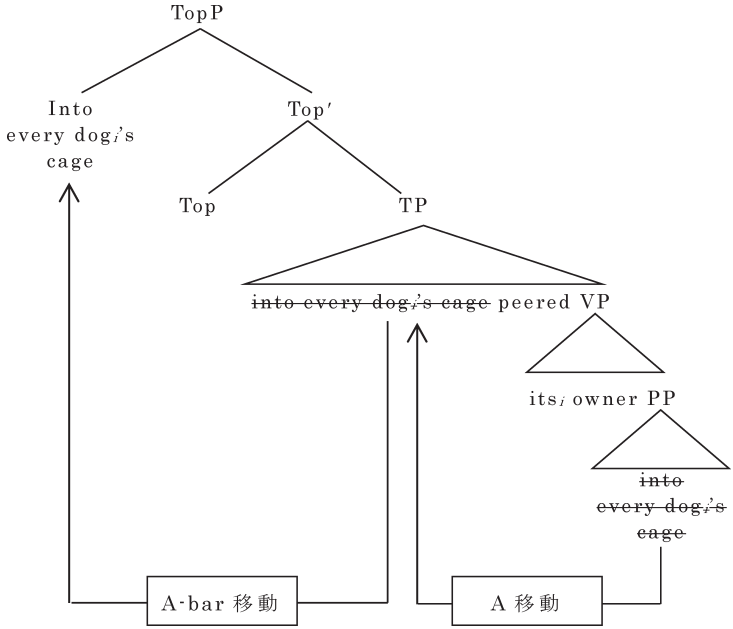
(69) では演算子 Who$_{2i}$ が his$_i$ と who$_{1i}$ の２つの変項を束縛しているため文法性が下がると Bijection 原理から説明される。

話題化文と LI 構文の容認性に関するコントラストを表す (66a-b) に立ち返ると、話題化文の (66a) と LI 構文の (66b) はそれぞれ (72a)、(72b) のような構造を持つ。

(72) a.


TopP
Into every dog$_i$'s cage
Top′
Top
TP
its$_i$ owner peered PP
~~into every dog$_i$'s cage~~
A-bar 移動

b.


TopP
Into every dog$_i$'s cage
Top′
Top
TP
~~into every dog$_i$'s cage~~ peered VP
its$_i$ owner PP
~~into every dog$_i$'s cage~~
A-bar 移動
A 移動

話題化された構成素と LI 構文の場所句は最終的に TopicP の指定部に A-bar 移動するという点で共通しているが、話題化要素は直接 TopicP の指定部に A-bar 移動しているため、元位置の into every dog's cage は (71) により、TopicP の指定部の into every dog's cage に A-bar 束縛される変項ということになるのに対して、LI 構文の場所句はいったん SPEC-T に A 移動してから TopicP に A-bar 移動しているため、元位置の into every dog's cage は局所的に SPEC-T にある into every dog's cage に項束縛されていることになり、変項ではない。(72a) では TopicP の every dog's が his と元位置の every dog's の２つの変項を束縛しているため、Bijection 原理により排除される。一方、LI 構文の (72b) では元位置の into every dog's cage は変項ではないので Bijection 原理の対象にはならず、さらに中間の SPEC-T に位置する into every dog's cage は TopicP の演算子に束縛される変項であるが、それと代名詞との位置関係は (67) の交差効果の構造をなしていないため（つまり、SPEC-T の into every dog's cage は同じ指標を持つ代名詞を越えて TopicT に移動しているわけではないので）、Bijection 原理を受けない。

以上のように、話題化要素が弱交差効果を受けるのに対して、LI 構文の場所句が弱交差効果を免れる事実を説明することができる。注目すべきは、この LI 構文と話題化文の弱交差に関する非対称性の説明において、LI 構文の場所句は一旦 SPEC-T に移動しているという川本 (2019) の主張が決定的な役割を担っている点である。このことから、この弱交差の事実は、LI 構文の派生に関する川本 (2019) の主張を裏付ける証拠となっていると考える。

（「LI 構文の派生とその理論的帰結 (3)」に続く）

注

6　Chomsky (2004) では、統語操作は一致 (Agree) と融合 (Merge) の２つのみに還元されるとし、移動 (Move) は融合の一種の内的融合 (internal Merge) として捉え直されている。しかしながら、本稿では A 移動と A-bar 移動を区別することが要所であることから、一貫して「移動」という用語を用いる。それに伴い、Chomsky (2004) が外的融合 (external Merge) と呼ぶ操作を「融合」と呼ぶ。

7　Chomsky (1986) は S を I (INFL) の最大投射 IP と分析したが、Chomsky (1995) は I を一致素性を担う Agr と時制を担う T に分離した。しかし、その後 Agr の存在は否定され、現在では TP と IP は同じ位置を指す。本稿ではこれ以降 TP で統一して表す。

8　Pesetsky and Torrego (2001) は、補文で主語・助動詞倒置を許す変種、言語は主節 C、補文 C ともに EPP 特性を有する解釈不可能な T 素性 (*u*T) を持ち、一方標準英語のように補文で主語・助動詞倒置を許さない変種、言語は主節 C の *u*T は EPP 特性を有するが、補文 C の *u*T は EPP 特性を持たないと提案している。尚、補文における主語・助動詞倒置は Hiberno-English に限られた特殊な現象ではなく、他のヨーロッパ言語でもいくつか観察される現象である。

i) Yiddish:

a. Vet ir fregn, vos volt ikh gemakht mitn dritn milyon?
will you ask what would I done with-the third million
'Will you ask what I'd do with the third million?'

b. Ikh farshtey nit vos iz dos far a verter.
I understand not what is that for a word
'I don't understand what kind of words those are.'

(Santorini 1995)

ii) Spanish:

Qué pensaba Juan [que le había dicho Pedro [que había publicado
what thought John that him had told Peter that had published
la revista]]?
the Journal
'What did John think that Peter had told him that the Journal had published?'

(Torrego 1984)

9 束縛 (binding) に関する用語の定義については Chomsky (1981) を参照。

参考文献

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.

Chomsky, Noam (1986) *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (2000) Minimalist Inquiries: The Framework. In: Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalism in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (2004) Beyond Explanatory Adequacy. In: Adriana Belletti (ed.) *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures*, Volume 3, 104-131. Oxford: Oxford University Press.

Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.

Culicover, Peter and Robert Levine (2001) Stylistic Inversion in English: a Reconsideration. *Natural Language and Linguistic Theory* 19: 283-310.

Diesing, Molly (1990) Verb Movement and the Subject Position in Yiddish. *Natural Language and Linguistic Theory* 8: 41-80.

Doyle, Roddy (1996) *The Woman Who Walked into Doors*. London: Vintage Publishing.

Henry, Alison (1995) *Belfast English and Standard English*. Oxford: Oxford University Press.

Hooper, Joan B. and Sandra A. Thompson (1973) On the Applicability of Root Transformations. *Linguistic Inquiry* 4: 465-497.

Joyce, James (1992) *Dubliners*. Dublin: The Lilliput Press.

川本裕未 (2019)「LI 構文の派生とその理論的帰結 (1)」『大阪学院大学外国語論集』第77号 .

Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky (1970) Fact. In: Manfred Bierwisch and Karl Erich Heidolph (eds.) *Progress in Linguistics*, 143-73. Berlin: Mouton.

Koopman, Hilda and Dominique Sportiche (1982) Variables and the Bijection Principle. *The Linguistic Review* 2: 139-60.

McCawley, James David (1981). The Syntax and Semantics of English Relative Clauses. *Lingua* 53: 99-149.

McCloskey, James (1992) Questions and Questioning in a Local English, MS., University of California, Santa Cruz.

McGuinness, Frank (2002) *Dolly West's Kitchen*. London: Faber and Faber.

Pesetsky, David and Esther Torrego (2001) T-to-C Movement: Causes and Consequences. In: M. Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 355-426. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Radford, Andrew (2009) *Analyzing English Sentences: A Minimalist*

Approach. Cambridge: Cambridge University Press.

Rizzi, Luigi (1997) The Fine Structure of the Left Periphery. In: Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*, 281-337. Dordrecht: Kluwer.

Santorini, Beatrice (1995) The Syntax of Verbs in Yiddish, MS., Northwestern University.

Torrego, Esther (1984) On Inversion in Spanish and Some of Its Effects. *Linguistic Inquiry* 15: 103-130.

The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences: Part 2

Yumi Kawamoto

This part of the paper argues why Locative Inversion and Topicalization behave alike in that neither of them can be applied in a subject clause while they behave differently in that the former does not produce weak crossover effects but the latter does.

Given Rizzi (1997)'s split CP analysis, it follows that the locative phrase in the Locative Inversion construction (LIC) and the Topicalized phrase in the Topicalization construction both move to the specifier position of TopicP because they carry old information, which must be mutually known or assumed by the speaker and addressee for the utterance to be considered appropriate in context. Syntactically, the subject clause shows the same distribution as the complement clause of factive predicates and the definite restrictive relative clause: they permit the LIC and subject-auxiliary inversion. Pragmatically, those clauses all carry a presupposition, whose truth is taken for granted in the discourse, which leads to the assumption that they lack TopicP and FocusP. Thus, the impossibility of application of Locative Inversion and Topicalization in the subject clause is accounted for since there is no position to which the fronted phrases move.

The LIC seems to be exempt from weak crossover effects whereas the Topicalization construction is subject to them. This difference in grammaticality is explained by assuming the fronted locative phrase in the

LIC stops by at SPEC-T, which is an A(rgument)-position. Since the locative phrase moves to an A-position, its copy left behind in the original position is not a variable and therefore is not subject to the Bijection Principle, which regulates weak crossover effects. The locative phrase further moves to TopicP leaving behind a copy in SPEC-T. This movement, however, does not cross the pronoun which is coindexed with the locative phrase, and therefore the copy in SPEC-T is not subject to the Bijection Principle, either. The weak crossover data thus points strongly to the conclusion that the fronted locative phrase makes a stopover at SPEC-T before reaching TopicP.